業務展望レポート			
2	大坂　庄司	所属名	徳島県中央こども女性相談センター
		職名	主任　児童福祉司

〔1〕研修参加の意義

現地で研修をすることにより、その国の現実や JICA の活動を知ると共に、ネパールで関わった人々との交流を通して、ネパールを好きになることであると思う。それは文科省派遣教員として3年間を過ごしたパラグアイや、文科省の委託事業で参加した「日独青少年指導者セミナー」（13日間）でのドイツでも実感したことである。今回の研修では、JICA 四国の主催ということで、JICA ネパールによる ODA 等の活動を知り、青年海外協力隊・シニア海外ボランティアの活動を見学し、交流を深めることは、教育関係者としてまた一人の人間として日本のあり方や生き方を考えるいい機会になった。

今回のネパールでの研修で感じたことや学んだことを子どもたちに伝え、国際協力や国際貢献について共に考えていきたい。海外のことも書物やテレビやインターネットで知りことはできるが、大切なのはその国に行き、自分自身が直接見て体験して肌で感じることであると思う。そのすばらしさを子どもたちに伝え、海外に関心を持ち、海外に行ったり、国際協力や国際貢献をする行動力のある子どもたちを育てることが、今回の研修の意義であると考える。

〔2〕海外研修全般に関する所感

9日間という短い日程であったが、実に密度の濃い充実した内容であり、ネパールの現実や課題を深く学ぶことができた。また、日本とネパールが友好的な関係にある背景には、ネパールの発展に向けた JICA による様々な分野での支援や、日本の多くの人々による地道な活動による成果があることを知ることができた。研修以外でも、シニア海外ボランティアの方による案内により、地域の文化や日常生活を見学したり体験したりして、観光旅行では味わえない貴重な経験を通してネパールを深く知ることができた。JICA 四国では初めてとなる教育行政担当者コースの研修に向けて JICA 四国の職員と JICA ネパール担当者との綿密な計画、ネパールでの JICA 同行者と現地デスクの連携と柔軟な対応により、すばらしい研修になったと感謝します。

〔3〕特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。

視察・訪問先	所感
パンチカール村現地事務所 （Love Green Japan による草の根技術協力）	植林やバイオガス発生設備の普及、有機肥料の推進、ため池の設置や学校建設など、そこに住む人々の幸せにつながる具体的な支援の内容が分かり、有意義であった。このような幅広い地道な活動も、代表の「何か人のためになる面白いことをやろう。」という発想から始まっているということに感銘を受けた。人と人とのつながりを大切にしながら、気負わず柔軟な考えが必要であることを学んだ。
サッチュワティ高等学校 （小中高一貫校）	首都カトマンズから車で 3 時間程の地方の学校であるが、そこでは青年海外協力隊員が活動していた。子どもたちの指導をはじめ、現地の教員の意識改革から授業の指導にまで努力していることに感銘を受けた。この学校だけでなく、周辺の学校を回り教員の資質向上にも精力的に活躍しているようである。日本に比べて環境や設備は整っていないが、子どもたちは真剣に授業を受けており、素朴でステキな笑顔が印象的であった。訪問団員との交流でも生き生きと活動していて、目の輝きに心を奪われた。
ホームステイ	地方の普通の家庭で1泊2日お世話になった。土間で調理する様子を見ながら、家庭料理であるダルバートを家族と一緒にいただいた。朝は玄関先でヒンドゥー教の祈りから始まり、朝食はホットケーキのような軽食であったが、母親が不浄の手とされている左手でパンを食べていたのは新鮮な驚きであった。また家で飼っている乳牛の乳搾りをして、その牛乳で作ってくれたチヤはとても美味しかった。言葉は通じないが、心を込めてもてなしてくれたことがうれしかった。日本では味わえないのどかでゆったりとした時間を過ごしながら豊かさや幸せについて考える機会になった。

〔4〕今後の業務における活用の可能性

・今は、徳島県中央こども女性相談センター（児童相談所）で児童福祉司として働いているが、日本に住む外国人の増加により、外国にルーツをもつ子どもたちやその保護者への相談業務や対応も増えてきている。我々は、日本人としての価値観だけで対応するのではなく、それぞれの国で日本と違った文化や習慣があり、それを理解して対応することでより良い支援につなげていくことができると思う。また、そのことを児童相談所の職員だけでなく、学校や関係機関にも伝え、広めていくことで、より良い支援ができるようにしていきたい。

・また、美術教師である私にとって、美術芸術の分野での伝統的な表現のすばらしさに驚かされた。南米のパラグアイではあまり感じることはできなかった。学校では図工や美術教育のされていないネパールでどうしてあのような表現や創作ができるであろうか。宗教が生活の根底にあり、伝統が受け継がれてきたからであろう。外国の美術芸術を鑑賞し、日本と比較しながら、日本のすばらしさも学ばせたい。その中から個性を大切にして、自己表現していく楽しさも味わわせていける制作活動につなげていきたい。

・現在も、中国や韓国との国際関係はぎくしゃくしているが、国境を越えて反戦の輪を広げるには、と聞かれた評論家の加藤周一さんは、「海外によく知っている友人がひとりいること、それが出発点」と、答えた。私も、国際交流はそんな友人を増やす営みであると思う。私自身ネパールでお世話になった人々の顔を思い浮かべると、その言葉の意味を実感することができる。今後、学校現場に戻ったときには、海外に目を向け、そんな友人を持ちたいと思い実践できる子どもたちを育てていきたい。またそんな子どもたちを育てたいと願う教師集団を作っていきたい。

【参考資料】

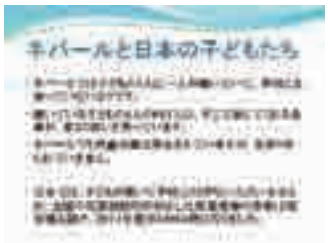
12/5(水)帰国後研修における発表資料

①

②

③

④



⑤

⑥

⑦